



Q 最近、目黒区に引っ越してきました。目黒区のごみの分け方・出し方を教えてください。



A 「資源とごみの分け方・出し方」というパンフレットに書いてあるよ!

パンフレット(右写真)は毎年発行していて、区の資源とごみの分け方・出し方のほか、地域別の収集曜日一覧を掲載しているよ。区のいろいろな施設で配布しているから、ぜひ利用してみてね(下記参照)。また、区(コード①)から、ダウンロードもできるよ。



【配布場所】総合庁舎本館1階区政情報コーナー・6階清掃リサイクル課、清掃事務所、地区サービス事務所、行政サービス窓口、住区センター、目黒区エコプラザ



目黒区清掃リサイクル課計画普及係
(☎ 5722 - 9883、FAX 5722 - 9573)

ごみに関するちょっとした疑問や質問をお寄せください

ハガキ・Eメールに、聞きたいこと、氏名(ニックネーム可)、年代を書いて、広報課区報係(〒153-8573目黒区役所〈住所不要〉、✉kohobosyu@city.meguro.tokyo.jp)へ。いただいた質問などから、ゴミラスが選んで回答します。



5/22は国際生物多様性の日

目黒区みどり土木政策課みどりの係(☎5722-9359、FAX3792-2112)

地球のいのち、つないでいこう



ささえあう生命の輪 目黒区生物多様性

5/22は、国連が生物多様性に関する普及と啓発を目的として定めた国際デーです。毎年この日に合わせ、世界共通のテーマに沿って生物多様性の保全に向けた普及啓発イベントが、世界各地で開催されています。

生物多様性とは、生き物や生態系の豊かさを表す言葉です。いろいろな生き物がいるということだけではなく、さまざまな環境に適応して進化してきた多様な生き物が、他の生き物と直接的・間接的に支え合って生きている状態のことを言います。

区は、まち全体に緑豊かな環境をつくりだし、野鳥などの身近な生き物との触れ合いが広がり、自然と共生する暮らしを实践する社会の実現を目指しています。身近な自然を守り、生き物たちとともに暮らせるまちをつくるために、私たち一人ひとりが、それぞれ主役になって自然にやさしい暮らし方をすることが必要です。



vol.10

よせ木グループ代表
ふじぬまさこ
藤沼政子さん

プロフィール

御年95歳。家庭で使われなくなったタオルや布などを集め、食食用エプロンや足拭きマットなどにリメイクして、高齢者施設へ寄贈するボランティア団体「よせ木グループ」の代表。30年近く活動が続けている。現在は、主に布エプロンの裁断を担当している。

工夫を凝らし、完成した布エプロン

「使わなくなったタオルや布を集めて、エプロンなどを作り、高齢者施設等に寄贈しています。施設利用者が、ご飯を食べる際に使うのですが、布とタオル地でできているため、こぼしたものを吸い取って受け止めたり、口の周りを拭いたりすることにも使えるため、重宝いただいています」と藤沼さんという。また、このエプロンには節約の面でも工夫を凝らしている。「はじめはタオルを2枚使って作っていましたが、集まるタオルには限りがあり、2枚使うのはもったいないと思い、1枚で作ることにしたんです。1枚だと大きさが足りないため、両端に布を縫い足して、作っています。その分、裁断や裁縫の技術や手間がいるのですが、長年の経験や仲間の知恵を借りてうまくやれています」と藤沼さん。こうした試行錯誤を繰り返し、今もエプロン作りは続けられている。



仲間と
楽しく活動できるのが
やりがい



＼タオル募集中/
使わなくなったタオルがありましたらお寄せください。
引き取り場所
めぐろボランティア・区民活動センター(中目黒2-10-13 中目黒スクエア内、☎3714-2534)

利用者から求められているものを作る

グループの中には、特別養護老人ホームから依頼を受け、直接出向いて、エプロンの修繕を行っているメンバーもいる。「新しいエプロンを渡せますが、利用者は自分の使っているエプロンに愛着を持っているので、同じものを直したほうが安心して使ってもらえるんです」という。また、利用者や施設スタッフの声を受けて、新しく布製品を作ることもある。「車椅子の足掛けの部分のカバーなども作っています。車椅子の足掛けの部分に直接足を掛けると冷たいんです。そこで直接触れても冷たくなような布カバーが欲しいという声を受け、作りました」と藤沼さんという。利用者のことを考えながら、日々活動に取り組んでいる。

仲間と毎週会えるのが楽しみ

毎週木曜日に活動し、日常の情報交換だけでなく、アイデアなども出し合っている。「エプロンの裏地タオルは何色が合うか、小物入れは、何に使えるかなど、アイデアを出し合っています。前は、小物入れをお薬手帳として使うかたが多かったですが、最近は、コロナ禍でマスク入れに使うかたもいます」と藤沼さんという。ボランティアでこの活動をしているが、「楽しいので私たちがボランティアをされているみたいで、本当にありがたいです」と笑顔で語ってくれた。

